

令和 4 年 5 月 19 日現在

機関番号：32728

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K12494

研究課題名（和文）青年期統合失調症者の臨界期における訪問看護師の教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Developed an educational program for home-visit nurses regarding proper homecare for individuals in the critical period of adolescent schizophrenia.

研究代表者

片山 典子（KATAYAMA, NORIKO）

湘南医療大学・保健医療学部看護学科・教授

研究者番号：40612502

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、初回精神病エピソードから5年以内の臨界期（以下、臨界期）の青年期統合失調症者の訪問ケアに困難を感じている訪問看護師を対象にした「青年期統合失調症者の臨界期に訪問看護を提供する訪問看護師のための教育プログラム」（以下、プログラム）を構築し、実施・評価したうえで、プログラムを開発した。開発したプログラムは、7つの内容で構成した。さらに有用性を実践の訪問看護を行う場で実証的に検証を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1) 先行研究では、精神科臨床経験がない訪問看護師を対象に関係構築や態度の形成を促す教育プログラムはあるが、臨界期の統合失調症者に関するものや青年期統合失調症者の訪問看護を提供している訪問看護師の教育プログラムを明らかにしたものはない。

2) 臨界期は、最も脆弱性が高く、自傷や自殺、触法行為、再発、家族機能の低下などさまざまな問題が生じやすい時期である。この時期の訪問ケアが適切に提供されることは「治療中断」を防ぐことに繋がり、対象者や家族の安寧を保つことにもつながる。また安定した地域生活を送ることは、入院医療費の削減につながる重要な点である。

研究成果の概要（英文）：We developed an educational program for home-visit nurses regarding proper homecare for individuals in the critical period of adolescent schizophrenia. The difficulty of program enforcement was then evaluated by the home-visit nurses who provided nursing care to adolescent schizophrenics experiencing their first mental disease episode up until those within the five-year critical period. The program developed was composed of seven contents. Furthermore, we studied the usefulness of the program at the institution that provided temporary home-visit nurses.

研究分野：精神看護学

キーワード：青年期 臨界期 統合失調症 精神科訪問看護師 教育プログラム 開発

1. 研究開始当初の背景

1) 研究の社会的背景

2014年の患者調査によると児童思春期青年期(24歳以下)で精神及び行動の障害がある子どもは、入院患者が5,000人、外来患者が26,600人である。この結果から31,600人の人が精神及び行動の障害がある。一方、現在ひきこもり状態にある子どもの世帯は、全国で約26万世帯と推計している(川上ら,2007)。外来患者が26,600人と少ないことから、精神保健医療福祉サービスを受けていない児童思春期青年期精神障害者が多いことが課題である。2004年に厚生労働省は「入院医療中心から地域生活中心へ」という我が国の精神保健医療福祉政策の基本方策として、これまで精神科病院からの地域移行と地域生活支援の充実が推進されてきた。今後はさらに地域で生活する人および新たに支援を要する者を含め、可能な限り地域生活が継続できることが強く求められている。2009年の「今後の精神保健医療福祉のあり方等に関する検討会」報告書において、精神保健医療体系の再構築や精神医療の質の向上などに関し、様々な提言が行われた。その報告書の中で、アウトリーチなどの地域生活支援体制や在宅医療の充実が課題となり、2011年度から「精神障害者アウトリーチ推進事業」が始まった。現在の日本の精神医療福祉政策の流れをみても未治療者や受療中断者への地域での訪問ケアは重要である。

2) 国内・国外の研究動向及び位置づけ

早期精神病のなかでも精神病発症後の5年は、臨界期(Critical Period)と呼ばれ、その後の中・長期的な疾病予後や社会機能を決定づける重要な時期であり、早期支援・治療の標的となる時期と考えられている。さらに長期追跡研究より臨界期は、再燃が多く、慢性的な残遺症状や機能低下はこの時期に形成することが多く認められる。特に発症年齢に関わらず発症後2~3年以内が最も自殺のリスクが高いことなども明らかにされた(Harrison,G.et al,2001)。この時期に適切な薬物療法を継続的に行えた群では、精神病と関連する脳構造変化を予防できたとする知見も報告されている(Lieberman, J. et al, 2005)。このことより、思春期青年期精神障害者の臨界期の支援が重要である。しかし、現状では疾患特性等により自らが医療、福祉のサービス利用を希望しないものや何らかの理由によって継続服薬やサポートが不十分となった結果、再発・再燃を繰り返すケースが多数見受けられる。治療継続には、臨界期に適した支援・治療が必要である。

精神障害者に対する地域ケア施策が急速に進められるなか、精神科訪問看護は精神障害者の地域での生活を支える上で、今日不可欠なサービスとなっている。精神科訪問看護は、1986年に診療報酬の裏付けを得て以降、2006年には退院前訪問指導料及び退院後3ヵ月以内の利用者への算定回数の上限緩和など、精神障害者の社会復帰を促すケアとしての位置づけがより明確になってきている。精神科訪問看護の提供主体は、医療機関と訪問看護ステーションであり、対象者の3分の2は統合失調症者が占めている(日本訪問看護振興財団,2001)。統合失調症者の精神科訪問看護の重要性が推察できる。一方、訪問看護の現状をみると精神科訪問看護経験がある職員が在中している施設は少ない現状にある(萱間,2008)。また精神障害者の個々の症状によりその対応が違っているため、看護師は自分の訪問看護に自信をもてないことが報告されている(船越ら,2006)。さらに平成26年の診療報酬の改定からは、精神科訪問看護基本療養費の算定する基準が精神科訪問看護に関する知識・技術の習得を目的とした20時間以上の研修を修了している者に変更となった。精神

科訪問看護の実践者には 20 時間以上の研修は終了しているが、精神科臨床経験がない状況で実践している看護職も多く、自信がもてないまま精神科訪問看護を行っている現状が推察できる。日本における早期介入やアウトリーチ支援に関しては、基本的な考え方が示された(厚生労働省,2015)が具体的なガイドラインは示されていない。臨界期にある統合失調症者の訪問ケアは、一部の訪問看護師による実践に限られる。そのため青年期統合失調症者の臨界期に訪問看護を提供する訪問看護師のための教育プログラムを構築していくことが必要である。

国外の精神科訪問看護におけるケア内容は、英国の「地域精神看護師」の機能としてカウンセリング、アセスメントの役割が多く報告され(Cowman S,2001)、薬物療法管理、患者や家族への心理教育、認知行動療法、ケアマネジメント、状況査定(モニタリング)機能も有している(Jordan S,1999;Gournay K,2000;Hannigan B,1997)。

国内の精神科訪問看護については、訪問看護師・保健師の訪問ケア技術(菅間,1999)、単身者に対する援助内容(川口ら,2004)、効果的な訪問看護の目的と技術(片倉ら,2007)、提供されているケア内容(瀬戸屋ら,2008)、提供するケアの類型と対象の特性(角田ら,2012)などが報告されている。また精神科訪問看護師に対する教育プログラムに関しては、精神科訪問看護経験がない訪問看護師を対象に関係構築や態度の形成を促す教育プログラムが報告されている(片倉,2008)。しかし、統合失調症者の臨界期に提供する訪問看護を網羅した教育プログラムを開発し実施した研究は未だみない。今後、更なる訪問ケアの発展を目指すためには、青年期統合失調症者の臨界期に訪問看護を提供する訪問看護師が、対象と信頼関係を築き必要な知識・技術を修得するための教育プログラムを開発・実施し、その有用性を検証することが必要である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、初回精神病エピソードから 5 年以内の臨界期(以下、臨界期)の青年期統合失調症者の訪問ケアに困難を感じている訪問看護師を対象にした「青年期統合失調症者の臨界期に訪問看護を提供する訪問看護師のための教育プログラム」(以下、プログラム)を構築し、実施・評価したうえで、プログラムを開発する。さらに有用性を実践の訪問看護を行う場で実証的に検証する。

- 1) 研究 1 : 臨界期の青年期統合失調症者を対象に訪問看護を提供している訪問看護師のための教育プログラムを作成する。
- 2) 研究 2 : 研究 1 の結果より作成した教育プログラムの実施・評価を行い、教育プログラムの再検討をへて、教育プログラムの開発を行う。
- 3) 研究 2 で開発した教育プログラム終了後に訪問看護の実践し、フォローアップ研修をへて有用性を検証する。

3. 研究の方法

1) 研究 1 : 本研究では、医学中央雑誌および MEDLINE、CINAHL を用い訪問看護師を対象とした早期精神病や青年期統合失調症者の訪問看護の内容に関する文献を収集しプログラム内容を抽出した。次に訪問看護財団および全国訪問看護事業協会が主催する精神科訪問看護基本療養費の届出要件を満たすセミナー等の収集した資料と文献検討の結果を比較し、相違点を明らかにした。また片山が開発した青年期統合失調症者の訪問ケアをしている看護職のケアリスト(以下、ケアリスト)と文献検討、資料検討の結果からケアリストの

内容を精選し、教育プログラムの内容、順序性、評価指標を決定した。さらに精神科訪問看護の経験者を含む研究者らで有識者アドバイザリーチームを構成し、教育プログラム内容について継続的に討議を重ね、教育プログラムを作成した。

2) 研究2: 研究対象者の選出にあたっては、自立支援医療(精神通院医療)施設のうち574施設、精神科訪問看護を行っているステーション2,415施設を対象に、研究の要旨を文書で説明し公募した。臨界期の青年期統合失調症者の訪問看護に困難を感じている訪問看護師で、研究協力の同意を得られた者を調査対象者とした。本研究は、研究協力の同意を得られた研究対象者に研究1の結果より作成した教育プログラムを実施する介入研究を行った。訪問看護師を対象とした介入(教育プログラム)および、教育プログラム前と教育プログラム後の質問紙調査(看護専門職における自律性測定尺度、研究1で作成した質問調査用紙)を行った。調査内容は菊池らが作成した「看護専門職における自律性測定尺度」を用いて自記式質問調査を行った。「看護専門職における自律性測定尺度」は、看護職が看護の理論・技術を主体的・自主的に活用するという行動レベルの力量を評価するものであり、態度能力、実践能力、具体的判断能力、抽象的判断能力、自立的判断能力という5つのサブカテゴリから構成されている(菊池, 1999)。

3) 研究3: 研究対象者の選出にあたっては、研究2の実施対象者140名に対して研究協力の説明を行い、研究協力の同意を得られた者を研究対象者とした。研究対象者には、フォローアップ研修を行い、研修以外の必要時にはメールや電話等でコンサルテーションを行った。

4. 研究成果

1) 研究1: 本プログラムは、文献検討、関連資料、片山らが開発した「臨界期にある青年期統合失調症者の訪問ケアをしている看護職のケアリスト」を基にプログラムを構築した。プログラム内容は、1日目に「統合失調症における早期介入の理解」「注意サインの早期発見」「臨界期にある統合失調症者に特有な対人関係」「就学・就労支援」をテーマに構成した。2日目は、「早期介入における家族支援」「訪問看護で行う認知行動療法的アプローチ」をテーマに構成し、最後に「事例検討」のグループワークを配置した。

2) 研究2: プログラムの実施期間は、2018年7月~2019年3月のうち、各開催場所2日間のプログラムで行った。開催場所は名古屋、横浜、埼玉2か所の4会場で行った。グループワークでは、各グループにファシリテーターを1-2名配置し、具体的な事例についてグループで検討した。回収数は140名(回収率94.6%)、有効回答数123名であった。対象者の性別女性110名、男性23名、無回答7名であった。年齢は20歳代から70歳代であった。看護師経験年数は、平均18.1年(SD=9.5)、精神科臨床経験年数は、平均6.4年(SD=9.2)、精神科訪問看護経験年数は、平均2.5年(SD=3.9)でした。使用した尺度47項目をプログラム前後のt検定で比較した結果、認知能力、実践能力、具体的判断能力、抽象的判断能力、自立的判断能力の5つの能力において有意差がみられた。認知領域においては「ニーズへの気づき」「言動と感情の不一致の理解」の2項目が特に有意差が目立った($p < .001$)。これはプログラムの「統合失調症における早期介入の理解」において基本的な臨界期の基礎知識が養われた影響が示唆された。実践能力においては「緊急時の看護」「看護の創意工夫」「社会的適応への指導」の3項目が特に有意差があった($p < .001 \sim .025$)。これはプログラムの「注意サインの早期発見」、「就学・就労支援」において症状のモニタリングや緊急時の対応、就労・就学に関する内容が影響していることが考えられた。具体的判断能力におい

では「心理的变化への看護」の1項、抽象的判断能力においては「看護モデルを用いた看護」「予測した問題への看護」「現在の状況への看護」の3項が特に有意差があった($p < .001 \sim .025$)。これはプログラムの項目に具体的な実践例を入れたことや早期介入におけるアスピレーション、ストレングス、リカバリーの主要となる理論モデルを用いた影響が示唆された。

3) 研究3: フォローアップ研修の実施は、2020年7月、2021年2月に実施した。フォローアップ研修の参加者は、17名であった。フォローアップ研修では、日ごろの実践場で困難に感じている事例を小グループで検討し、全体で共有した。コンサルテーションの主な内容としては、ケースマネジメント、就労支援、家族支援、CBT、クライシスプラン、セルフモニタリング、多職種連携、社会資源等であった。使用した尺度47項目をフォローアップ研修前後のt検定で比較した結果、認知能力の1項と具体的判断能力の1項は有意に増加していたが、他の項目は低下または変化がみられなかった。平均点の低下がみられた項目のうち抽象的判断能力の「39. 私は患者の変化(結果)を予想して看護を選択することができる」の1項で有意に低下した。プログラム実施後に得られた認知能力や具体的判断能力、抽象的判断能力の維持・向上には、プログラム実施後に定期的なフォローアップ研修を行い、継続的な教育的な支援が必要といえよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者には下線)

[雑誌論文](計2件)

- 1) 片山典子、荒木田美香子、川野雅資: 青年期統合失調症者の臨界期における就学・就労に関する訪問ケア実践、日本看護研究学会雑誌、40(3)、p371、2017.
- 2) 片山典子: 青年期統合失調症者の臨界期における早期介入の文献検討、日本アディクション看護学会誌、17(1)、p100-p111、2020.

[学会発表](計4件)

- 1) 片山典子、荒木田美香子、川野雅資: デルファイ法による青年期統合失調症者の臨界期における訪問ケアリストの開発、第37回日本看護科学学会学術集会、2017.
- 2) 片山典子、荒木田美香子: Effect inspection of a home visit-care content list for adolescent schizophrenia patients in the critical period、APNA (American Psychiatric Nurses Association) 33rd Annual Conference、2019.
- 3) 片山典子、石川博康、井上喬太、玉田聡史、荒木田美香子: 臨界期にある青年期統合失調症者に訪問看護を提供する訪問看護師のための教育プログラムの検討、第39回日本看護科学学会学術集会、2019.
- 4) 片山典子、荒木とも子、内野小百合: Development of an educational program for visiting nurses who visit adolescent schizophrenia patients in critical period、APNA (American Psychiatric Nurses Association) 34rd Annual Conference、2020.

6. 研究組織

1) 研究代表者

片山典子 (KATAYAMA NORIKO)
湘南医療大学・保健医療学部看護学科・教授
研究者番号: 40612502

2) 研究分担者

荒木田美香子 (ARAKIDA MIKAKO)
川崎市立看護大学・看護学科・教授
研究者番号: 50303558

3) 研究協力者

前川 早苗 (訪問看護ステーションあいさ 所長/専門看護師)
石川 博康 (東京都立広尾病院 看護部 専門看護師)
玉田 聡史 (湘南医療大学・保健医療学部看護学科・助教)
陶山 克洋 (湘南医療大学・保健医療学部看護学科・講師)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 片山典子	4. 巻 17(1)
2. 論文標題 青年期統合失調症者の臨界期における早期介入の文献検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アディクション看護	6. 最初と最後の頁 P100-P111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片山典子、荒木田美香子、川野雅資	4. 巻 40(3)
2. 論文標題 青年期統合失調症者の臨界期における就学・就労に関する訪問ケア実践	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本看護研究学会雑誌	6. 最初と最後の頁 P371
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 NorikoKATAYAMA
2. 発表標題 Development of an educational program for visiting nurses who visit adolescent schizophrenia patients in critical period
3. 学会等名 APNA (American Psychiatric Nurses Association) 34rd Annual Conference (A Virtual Conference) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 NorikoKATAYAMA
2. 発表標題 Effect inspection of a home visit-care content list for adolescent schizophrenia patients in the critical period
3. 学会等名 APNA (American Psychiatric Nurses Association) 33rd Annual Conference in New Orleans, LA (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 片山典子
2. 発表標題 臨界期にある青年期統合失調症者に訪問看護を提供する訪問看護師のための教育プログラムの検討
3. 学会等名 第39回日本看護科学学会学術集会（石川県）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 片山典子、荒木田美香子、川野雅資
2. 発表標題 デルファイ法による青年期統合失調症者の臨界期における訪問ケアリストの開発
3. 学会等名 第37回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	荒木田 美香子 (ARAKIDA MIKAKO) (50303558)	川崎市立看護短期大学・その他部局等・教授 (42729)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------